

2013年4月19日・20日 第14回 フランス日本語教師会  
於：レンヌ第一大学（レンヌ経営学院）

報告者：池田玲子

【シンポジウムの主要テーマ】

『協働』という新しいキーワードをめぐって  
ヨーロッパにおける日本語教育の方法と目的

フランス日本語教師会主催の第14回フランス日本語教育シンポジウムがレンヌ第一大学において開催されました。100人収容の会場がほぼ満席になるほどの盛況ぶりでした。

シンポジウム会場

レンヌ第一大学



今回のシンポジウムのテーマは「協働」でした。私（池田）は第一日目の午前の基調講演者として参加しました。演題は「創造的な学習のための協働学習（ピア・ラーニング）ー理論と授業デザインの実際ー」とし、90分の講演を行いました。私にとっては協働学習（ピア・ラーニング）のテーマでヨーロッパの日本語教育関係の場でお話するのは今回が初めてのことでしたので、冒頭の挨拶まではさすがに緊張してしまいました。ですが、その後はとにかくご参加くださった方々の熱心な視線に励まされ、最後まで気持ちよく話しすることができました。内容は、日本語教育で協働が注目されるようになった社会背景や日本語教育における協働学習の必要性、これまでの研究でどのようなことが実証されてきたか、最後に私の実践してきた協働学習授業の事例紹介をいくつか示しました。最後に、授業デザインのポイントや実施の際の留意点について私の見解を述べました。私から参加者へのメッセージは、「日本であれフランスであれ、今後のグローバル化社会を生きる人間には協働的に学ぶ力が必要であり、日本語教育においてもこれを追究すべきだと思う。教室で日本語を学ぶ学習者の背景、教室を取り巻く社会環境、そして教師の背景に適した協働学習のあり方は、教室がおかれる個々の地域によって異なるはず。ぜひ、フランスの教室でフランスに住む日本語教師が実践する協働学習のあり方を追究して欲しい。私が今話した内容は、日本で日本語教育を実践している一人の教師からの情報提供にすぎ

ない。今後、フランスでの日本語協働学習の発展と日本語教育から他分野への発信がなされることを期待したい。」としました。

最近の私の講演や研修では「ミニ講義」を途中でいくつかはさみつつ、ワークショップに多くの時間を配分してきましたが、今回のフランス講演では珍しく参加者の活動をごくごく短時間に抑え、できるだけ協働や協働学習についての概要をお知らせすることにしました。今回は時間的に短いので、私の話はフランスの先生方が「協働学習」と聞いて最初に知りたいことに対する情報提供になるようにと考えました。話し終わったときには、できればこの機会が私がヨーロッパでの協働を考える最初で最後の機会とならないようにと願う気持ちでいっぱいになりました。もっと聞いてもらいたい、もっと知ってほしい、一緒に考えてほしいという名残惜しい気分で講演を終えました。



**【講演】「コミュニケーション・アプローチから行動主義アプローチへ もしくはインター・アクションからコ・アクションへ」クリスチャン・ピュレン先生**

午後の最初はフランス人のピュレン氏による講演がありました。タイトルを見て、とても興味深い内容だと思いました。しかし、私はここがフランスだということを忘れてしまい、他の参加者と同様に席についてしまいました。ピュレン先生の講演はフランス語でしたので、残念ながら私は事前資料（日本語訳）のみから得られる前情報だけから参加者の皆さんの熱心な傾聴の様子と、途中で何度も湧き起こる笑いから、講演の内容が間違いなく興味深い内容なのだろうと想像するしかありませんでした。

事前資料によれば、ピュレン氏の主張は、行動中心パースペクティブとコミュニケーションアプローチを補完的手段として教師はもつべきだというものでした。教師は多様化する学習者、教育の目的、環境の多様化に適應する能力を磨く必要があるからだとして述べています。行動主義パースペクティブとは CECRL の学習目標を指しているようです。ピュレン氏は、今後の言語教育はインターカルチャーからコ・カルチャー（協文化）へと進むべきだと強調しています。コ・カルチャーとは、学習環境、労働環境において全参加者が自分たちの活動に対して共通に抱いている考え方の全体と定義されるものです。おそらく、この

コ・カルチャーというのが協働学習の目指す社会的な学習環境と重なるものだと推測されます。実は、私はまだ CECRL についてよく理解していないので、この部分の報告は正確ではない可能性が高いです。シンポジウム会場でベルギーの櫻井直子先生からいただいた「複言語教育研究」という冊子を読み始めていますので、今後 CECRL について少しでもわかるようになりたいと思っております。

### 【ワークショップ】「みんなで考える、だから、できること」奥村三菜子先生

午後の後半には、ドイツの大学で長く日本語教育に携わってこられた奥村先生による教師が協働することについてのワークショップがありました。私は日本を出発する直前に奥村先生からワークショップ資料を送っていただきましたので、概要を拝見しておりました。奥村先生が私と同じように協働に対するご理解をお持ちの方で、その協働の概念に沿ったワークショップの内容でしたので、きっと参加者の皆さんは奥村先生のワークショップに参加することで協働することの意義を実感してくださるだろうと大きな期待を持っておりました。実際、奥村先生のワークショップではヨーロッパの日本語教育事情や日本語教室の先生方をよく把握された上での課題設定でしたので、会場の参加者のみなさんは非常に活発な議論を展開されていました。私自身もグループ討論に参加できたので、そこで多くのヨーロッパ教育事情や日本語教師のご苦勞、ご努力の現状を聞かせていただくことができました。

\*実は、このときの私が参加したグループにいらした河合先生には、翌日レンヌの町散策を一緒にいただくことができました。河合麻里絵先生とお知り合いになったのは、このワークショップに参加できたおかげです。



今回フランス日本語教師会に初めて参加された  
河合麻里絵先生  
日本語教育歴は2年目というお若い先生です。  
今後どうぞご活躍ください。

### 【研究発表・実践報告】

奥村先生のワークショップの後の夕方のセッションでは、協働をテーマとした2つの研究発表がありました。私はこの二つの発表が今の自分の研究テーマと非常に重なる内容だったので、思わず感激のコメントを発言してしまいました。このシンポジウムに出席できたからこそ得られた貴重な情報でした。

一つはアイルランドの日本語教師たちのネットワークを構築するために尽力されてきた近藤裕美子先生のご発表でした。「教師間の協働・学び合いの場の構築を目指してーアイルランド中等教育段階の日本語教師への支援を事例として」というタイトルで、近藤先生

が地域に点在する教育機関で教える日本語教師たちの協働をいかにして実現してこられたのかのプロセスが詳細に報告されました。教師研修と教師間のメールによるコミュニケーションを通して、実践課題がどう遂行されていたか、メールの機能そのものの変化についてなど、たいへん興味深く聞かせていただきました。私が抱えているアジアの日本語教育のネットワーク構築の課題において非常に参考になる内容でした。

二つ目は、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学の櫻井直子先生とフランスのグルノーブル・スタンダール第3大学の東伴子先生との共同研究の発表でした。タイトルは、「共同プロジェクトから協働へ ―二機関共同プロジェクト活動からの考察―」というもので、国を超えたプロジェクト活動をいかに協働で進めていくかという内容の発表でした。櫻井先生と東先生との共同と協働、そして比較対照された「連携」の定義が私の捉えている協働と連携の定義と重なっていて、遠くヨーロッパにも私と同じように考えている方がいるといううれしさに浸ってしまいました。単に連絡を取り合って互いを知るだけの連携や共同ではなく、一緒に新たなものを生み出す協働が国を超えた日本語教師間において実現できることの事例報告でした。この報告もまた今後の私の研究において非常に貴重な参考事例となるものでした。

#### 【特別講演】「村上春樹の日本語はなぜおもしろいか」 牧野成一先生

二日目の午前には、アメリカから参加された牧野成一先生による特別講演がありました。話題はアメリカでも非常に人気の高い村上春樹の文体の特徴についてでした。「村上春樹の日本語はなぜおもしろいか」というタイトルに、私が予測した回答は「センテンスの短い文章」「こねくりまわさない端的な表現」でした。牧野先生のお話の中では、村上春樹作品研究において指摘されてきたことの紹介だけでなく、牧野先生ご自身がプリンストン大学において実際に村上春樹氏との交流を通して得られた情報や観察から導き出された回答が示されました。音楽、リズム、接続詞の不使用、翻訳と日本語など印象的なタームが私の頭の中にも残りました。今後、村上氏の作品を読むときにこれらを意識的に読むと、これまでとはまた違った作品の味わい方ができるのではないかと思います。

#### 牧野成一先生の特別講演



### 【口頭発表とポスター発表】

午後のセッションでは、フランスだけでなくケニアやトルコの日本語教育の方々からの発表がありました。またポスター発表が2つの会場を使って行われました。



ヨーロッパのシンポジウムの面白さは、開催国だけでなくこうして近辺の国々からの参加者が学び合うことができる場にできるところにあるのではないのでしょうか。初めて参加した私にとっては、予想していた以上にヨーロッパの活気を感じることができた会でした。終わってみると、ぜひまた参加したくなるような会でした。今後、私でも何かヨーロッパの日本語教育に貢献できるようなことはないだろうかと帰国の飛行機の中でずっと考えておりました。頭の中では、少しだけ光が見えてきた気がします。私の一人よがりの発想かもしれません。私の「びっくり提案」をこれから仲間と議論していきたいと思います。



#### シンポジウム受付にて

右：パリの国際交流基金に2週間前に赴任された  
篠崎摂子先生

左：パリの国際交流基金に勤務されている蜂須賀  
真希子先生

このシンポジウムに招聘して下さったフランス日本語教師会会長の東伴子先生、最初にフランスからお電話くださった大会実行委員長の国村千代先生、当日までの数か月にわたってご丁寧なご案内と連絡等でたいへんお世話になった代田智恵子先生、渡航宿泊などのご面倒な手配をして下さった竹内先生、その他シンポジウムのスタッフの方々に深くお礼申し上げます。こんな素敵なレンヌの町と素晴らしいシンポジウムに私を招待して下さったすべての方々に心より感謝いたします。



中央の3名

右：大会委員長の国村千代先生

左：代田智恵子先生